

「遠近両用福音」

「園長先生の良い所って何？」と幼稚園の子どもに聞かれ、即答できませんでした。日本人らしいと言うべきか、なかなか自分の長所を、自信をもって主張することは難しいものです。採用面接で、当たり前のように「あなたの長所を教えてください」と言いますが、私もそんな質問をしてしまいましたが、本心から誇れる長所を持っている人って、どれくらいいるのでしょうか。もっとも採用面接の場面では、求められる人物像がある程度絞られているので、「面接に受かるために」という目的で、自分の長所を上手く表現することはできるかも知れません。むしろ、そういう縛りの無い無邪気な質問にこそ、答えるのは難しいと感じました。私の長所って、何なんだろうか。なんと答えればいいのか。

でも、この悩みは、すでに解決済みです。解決の糸口となったのは健康診断でした。敦賀教会幼稚園では、毎年夏休みの期間に、教職員の皆さんには健康診断を受けてもらっています。診断項目の中には、身体測定や血液検査、心電図、X線検査などがあるわけですが、視力検査も含まれています。昨年の視力検査で、私は裸眼で 1.5 でした。その話を、妻にすると、「もう、あなたの長所は、視力 1.5 ってことでいいんじゃない？」と言われました。なるほど、と思いました。変に、あれができる、これができる、とか。身長がどうか、性格がどうか、実績があるとか、ないとか。そういうことって、確かに相手によっては不愉快に聴こえることもあるわけで、とりあえず「目が良いです」って答えておけば、非常に無難だな、と。まあ、幼稚園の子どもに、そこまでの気を使う必要があるのか、どうかは、ちょっと分かりません。でも逆に、「うちの園長先生の良い所って、目が良いんだってー」という評判は、それはそれで面白くて、印象に残りそうな気はします。なの

で、今度から、大人子ども問わず、「あなたの長所は？」とか「良い所って何？」と聞かれたら「視力 1.5 です」と答えようと思います。

思えば、昔から、視力の良さだけは、褒めてもらっていました。「何もつけていないのに、遠近両用がいいね」と言われたこともあります。言われてみれば、確かに裸眼は、そもそも遠近両用なわけで、それだけで、かなり恵まれているんだな、と思いました。出来るだけ、この恩恵を維持していければいいなあ、と。ただ、目が良いと、老眼になりやすいとも言われるので、そうなったら、そうなったで、まあ、受け入れるしかありません。実は、眼鏡にもちょっと憧れがあったりします。ただ、コンタクトレンズは、怖いので入れるのには、かなり勇気がいると思います。

なんていう、私の視力の話は、これくらいにしておきますが、遠近両用で有難いのは、目もそうだけど、福音もそうですね、というのが、今回の説教題であります。遠くても、近くても、福音は霞まないんだ、ということです。今回の聖書箇所 17 節にある「遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音が告げ知らされました」という聖句は、敦賀教会幼稚園が加盟しているキリスト教保育連盟の 2023 年度年間聖句です。幼稚園でも、4 月 3 日の始業日礼拝において、この聖書箇所でお話を致しました。

「遠くても、近くても」という福音が告げ知らされるという事実は、もちろん、本来の意味から言えば、物理的な距離のことを言い表しています。このエフェソの信徒への手紙を書いたパウロさんが、手紙でのやり取りを余儀なくされるくらい遠くにいるエフェソの人たちのところにも、そして、声の聞こえるくらい自分の近くにいる人たちのところに、全く変わらない同じ福音が届いている、ということを伝えています。この文脈における「遠い、近い」は、単純に物理的な距離のことです。ただし、11 節から 16 節までのメッセージを読み込んで、解釈をするなら、身分の違いという距離感、信仰の差という距離感、理解の違いという距離感など、物理的ではない、精神的・思想

的な距離についても「福音は霞まない」ということが説明されているかと言えます。「しかし、あなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです」。この13節の御言葉は、手紙という手段がはるか彼方の友人に伝言を届けるように、十字架のイエス様が身分を超えて、考え方の違いを超えて、福音を届けてくださる可能性について教えています。「キリストの血」という表現で示されている「主の十字架」とは、信じる者にとっては救済と贖罪の徴であります。たとえば、その信仰的事実を知らなくとも、神様の愛によって、半ば一方的に、「キリストから遠く離れている人を近くに招く」という働きがあったということです。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」。敵意という、明らかに物騒な感情を、キリスト教に対して持っている人は、そう多くないと思いますが、「近寄りたくない」「理解に苦しむ」「何だかよく分からない」という消極的な感情を持っている人は確実にいるでしょう。しかし、少なくとも、主の十字架は、この消極的な感情に対して、また、そういう感情を抱く人たちに対して、威張ったり、拒絶したり、否定したり、脅迫したり、はしなかった、という点が重要です。つまり、イエス様の血が流された、あの十字架は、和解であり、平和なのです。

幼稚園の先生たちにも、そのことを伝えました。神様の愛や、イエス様の福音は、信じる信じない、好き嫌いを問わず、とりあえず、誰のところにも届いているんですよ、と。近くによろが、遠くにいようが、霞むことはないんですよ、と。だから、あとは、その御声を聞くかどうか、その御業を見るかどうか、私たち次第なんですよ、と。まあ、この説教の言葉にしても、それ自体が、届いているのかどうかは分かりませんが、でも、それでも、いいんです。福音は遠近両用。心が離れ

ていても、信仰から遠のいていても、届く時には、ちゃんと届きます、きっと。

だから、すでに信じている私たちがすべきは、徹頭徹尾、「和解と平和」です。それは、別に幼稚園の先生たちに対して、という限られた話ではありません。全てのノンクリスチャンや、教会から離れている人たちに対して、私たちは、イエス様が十字架で血を流された意味と目的を果たしていくのです。穏やかに、思慮深く、相手の気持ちを斟酌しつつ、隣人愛に根差した言葉と行いを尽くしていく。特段、目新しい宣教方法ではありませんが、でも、基本は大事です。「神は愛です」というヨハネの手紙一4章16節の短くも強力で、かつ最も基礎的な信仰理解は、私たちのあらゆる言葉と行いに影響していきます。イエス様は、ご自身から遠く離れている人にも、近くにいる人にも、平和の福音を告げ知らされたのです。言い換えるなら、ご自身のことを嫌う人にも、好む人にも、同じように声を掛け、心を配ったのです。その立ち振る舞いに、私たちは従い、見習いたいと思います。

そして、何よりも、すでに福音を信じて、「神の家族」になっている私たちは、「神の家族」になったことを素直に喜んでいたいと思います。感謝していたいと思います。別に、その幸せを見せびらかすわけではないですが、「イエス様を信じていて良かった」という証しを、言葉や行いで示していくのです。そして、もし、出来るなら、ノンクリスチャンの人たちが、「いいなあ、信じることができて」と思ってしまうくらいに、妬まれるくらいに、私たちは喜びを纏うことができれば、上出来です。そこが、とりあえずの目標地点です。と言っても、決して簡単なことではありませんが、でも、私も一信仰者として、「信じて良かった」という単純だけど大切な経験を伝えて行きたいと思います。

イエス様から遠くても、近くても、そんなことは関係なく響き渡り、行き渡る「遠近両用福音」を私たちも信じて、喜んで、そして、担ってゆきたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。この安息日は、私たちの間に敵意を生み出すためのものではなく、私たちの安息のために備えられたものであることを、信じます。今日、この礼拝堂に集うことを赦された私たちは、あなたに感謝し、賛美の声をお捧げ致します。今日、この礼拝堂に集うことのできなかつた方々の上には、あなたからの祝福と恵みがありますように、どうか御守りください。今日、近くにいる私たちのところにも、遠くにいる方々のところにも、等しくあなたの愛が示されますように、切に祈ります。私たちは、この後、教会総会を開催します。あなたの福音を信じ、喜び、宣べ伝えるという、その目的の為に、私たちが知恵と議論を尽くすことができますように。敵意ではなく平和を、拒絶ではなく和解を目指すことができますように。どうか、私たちの交わす言葉の一つ一つを良き実りへと変え、あなたの御心に叶う歩みへと導いてください。

このお祈りを平和の主であるイエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。